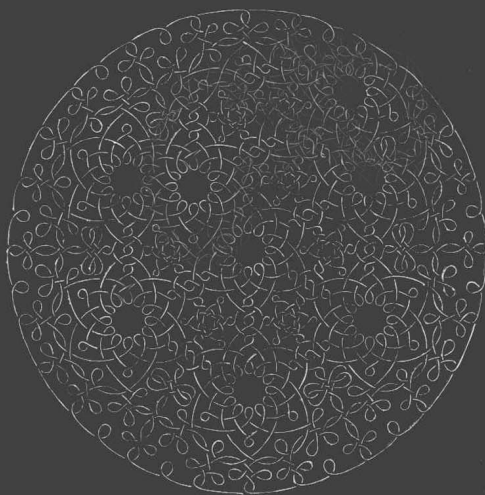


思考のアラベスク
栗津則雄



第三文明社

思考のアラベスク

一九七七年十月三十日初版発行

著者栗津則雄

発行者栗生一郎

発行所株式会社第三文明社

東京都千代田区猿樂町二ノ五ノ四

郵便番号一〇一

電話東京二九四局八七三一番(代表)

振替東京五一一七八二三

印刷所図書印刷株式会社

製本所株式会社星共社

1070-3063-4438

©1977 Norio Awazu

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

思考のアラベスク 目次

I

旅心 9

にわか政治犯 19

或る娼婦の話 23

ナポリ弁護 26

或る感想 28

衰弱について 30

魚について 33

コーヒー好きの感想 37

豊醇な苦さ 40

詩の朗唱の夕べ 43

随想一年間 49

II

音楽の魔力 65

夕べの音楽 68

音楽の楽しみ 72

一枚のレコード 75

小品の楽しみ 77

ベルリン・オペラの思い出 80

ウィーン・フィルハーモニーをめぐって 83

ロストロポーヴィッチについて 86

安田謙一郎 91

ジェラール・ジャリの個性 95

ピリスをめぐって 98

ホロヴィッツのスクリャービンとシューマン

ポリーニ断想 107

モーツァルトのいる風景 110

マーラーとブルックナー 115

ドビュッシーとラヴェル 123

吉田秀和氏をめぐって 131

III

絵を見る 145

ゴッホをたずねて 150

シュルレアリスム雑感 155

或る私立現代美術館 159

『ラスコーの壁画』G・バタイユ著 166

『美の王国の入口にて』池田満寿夫著 169

明るい地獄 渡辺惇三の小宇宙展によせて 173

鳥海青児の世界 175

『北大路魯山人』白崎秀雄著 180

高村光太郎 伝統と近代性 190

アントニン・レーモンド 日本的なものへの透視 212

あとがき 249

初出一覧 250

装幀 菊池薫

思考のアラベスク

旅 心

数年前の初夏、イタリアを旅行したときのことだ。シエナからアッシジへ行くとして、あいにく速い汽車がなかったので各駅停車のおそい汽車に乗ったのだが、これがなんともものんびりとした汽車であった。各駅にとまるのはいいとしても、どの駅でも実に長々とまっている。どういふ事情があるのかはわからないが、或る駅などでは四十分近くもとまっていた。ずいぶん間の抜けた汽車に乗ったものだと思い、最初は少々苛々していたのだが、そのうちに、こののんびりとした味わいが実に快いものに思われてきたものだ。どことも知らぬ駅に着き、二、三人の客が声高に何かしゃべりながら降りて行ったあとは、森閑とせずまりかえって何の物音もしない。時折、機関車が蒸気を吹き出す鋭い音がするが、そのことはいっそうしずけさが増すようだ。駅のまわりには一軒の家もなく、ただ一面に麦畑がひろがっている。窓に肘をついて、明るい陽に照らされたその麦畑をぼんやり眺めていると、ホームのうしろの方から、緑と白にぬった箱を首からぶらさげたアイスクリーム売りの少年が、「ジェラーティ、ジェラーティ」と、かん高い声で叫びながら、ゆっくりと歩いてくる。はっそりとした白い横顔を見せて私の前を通りすぎ、先の方まで行って戻って来る

と、それで仕事は終つたらしく、あとはまたしずまりかえる。突然、別の客車のあたりから、子供のはじけるように笑う声がかえ、それに向かつて何か言うおとなの低い声がする。それらは実にくつきりとした輪郭をもって響くのだが、再び静寂が戻ってくると、今聞いたのは空耳ではなかったかという気がしてくるほどだ。こんな状態が長々と続き、私が、ひよっとするとこの汽車はこのまま動き出さないのではあるまいかなどと、あらぬことを考え始める頃になって、汽車は、なんの発車の合図もなしに、身体をひとゆすりして、ゆっくりと動き始めるのである。

突然時の歩みがおそくなったようなこののびやかな動きに身を委ねながら、私は、自分が、こういう味わいをずいぶん長いあいだ忘れてしまつていたことを鋭く意識したものだ。日本にいたとき私が利用したのは、ほとんど新幹線や特急だったし、止むをえず普通列車に乗ることはあつても、それはまさしく止むをえずであつて、その動きのゆるやかさにのんびりと身を委ねるということとはなかった。要するに、いずれの場合も、汽車は、目的地に着くための手段にすぎず、そこでは、汽車の動きと私の心の動きとがとけあうことによつて生ずる一種の旅心など味わいようもなかったのである。そして、いったんこういう思いにとらえられると、記憶の底から、さまざまな思い出が群がり起り、私はほとんど始末に窮した。私が育つた田舎町は、私鉄の終点であつて、私は、少年の頃、貨物用の倉庫のある人氣のない引込線のあたりによく遊びに出かけたが、そのときの、線路の砂利の乾いた刺すような臭いや、使わない線路の赤錆びたレールを埋めるようにはえていたつくしや、その緑にアクセントをつけるように点々と咲いているタンポポの鮮かな黄色が、そしてそれら全体を包む充実した静寂が鮮かに思い浮かんだ。少し長い汽車旅行をしたとき、窓からあかず眺めていた、あの波打つようにゆるやかに上下する電線の動きや、無数に田に降りていたからすの群や、カーヴのとき窓から見える、煙を吐きながらいかにも息せききつて走っているといった感じの機関車の姿などが思い浮

かんだ。そしてさらに、中原中也のこんな詩も心に浮かんだ。

青い空は動かない。

雲片くも一つあるでない。

夏の真昼の静かには

タールの光も清くなる。

夏の空には何かがある。

いじらしく思はせる何かがある。

焦げて図太い向日葵が

田舎の駅には咲いてゐる。

上手に子供を育てゆく、

母親に似て汽車の汽笛は鳴る。

山の近くを走る時。

山の近くを走りながら、

母親に似て汽車の汽笛は鳴る。

夏の真昼の暑い時。

私は、異国の野を走る汽車の窓に肘をつきながら、こういう思い出で心をいっぱいにして、何か灼けつくようなまなざしで窓外を眺めていたのである。

＊

私のこのようなさやかな経験は、あらためて私に、われわれの日常感覚をむしろぼんでいる抽象性を考えさせてくれたのだが、その点、あのルノワールが、好んで普通列車で旅行したという話は私にはいかにも面白い。近代の画家のなかで、ルノワールほど、おおよそいつさいの抽象性と無縁な、つねに具体的な生のなかに身を委ね続けていた画家は稀だろうが、息子の映画監督ジャン・ルノワールが伝えるところによると、彼は、普通列車の持つ「他の列車よりもっと本当の生活の現われのなかに浸してくれるという利点」を高く買い、「つい隣の県庁所在地にチーズを売りに行く農家の女はふだんのままの彼女だよ。ところが、長旅で急行に乗ったりすると、ふだんの自分をなくしてしまふんだ。旅客という無名の存在になってしまふんだよ」と語っていたということだ。父オーギュストを語ったジャンの回想『わが父ルノワール』は、実に面白い本であって、近頃の伝記文学のなかでの傑作といっていいが、そのなかでジャンは、父の旅行ぶりを、こんなふう

に生きいきと描き出している。

……三等車の常連はたいいてい気前がいい。皆あらそってルノワールに、それぞれが持ってきて来ている「弁当用バスケット」をいっしょに食べようと言った。或るおばさんは、彼がポケットからとり出したサンドウィッチをいかにも同情したように見やりながらこんなことを言った。「あんたの昼飯はそれっきりかね。それじゃそんなに痩せっぽちなのも不思議はないね。」まるで世界一周でもするほど食糧をかかえこんで出

かけてくる連中もいた。何キロか走るあいだに、父は、ブルゴーニュのグリュイエール・チーズからプロヴァンスの蒸し肉まで、コート・ドールの新葡萄酒の小瓶から、ローヌ沿岸地方の強い赤葡萄酒まで味わえた。こういう飲みくいに付きものの話題は、収穫についての意見や、家庭内の心配ごとや、税金や、トンキンの戦争や、コルセットの辛さなどだった。「着つけていないとひどいものさ！」或る肥った農家の女は、二、三杯ひっかけると、もう我慢が出来なくなり、ぶつぶつ言いわけをしながら、胴着のボタンをはずし、隣の女に、背中のあるところのコルセットの紐をほどいてくれと頼んだものだ。こうして肉体が解放され、思うがままにのびのびとすることが出来た。野兎のパテ料理の味わいも、やっと充分に楽しむことが出来たわけである。

地方ごとになまりもかわった。葡萄作りたちの舌を巻舌でひびかせるブルゴーニュ言葉が、リヨンの連中の単調な話しぶりにかわり、それも聞かれなくなつて、デュランス河近くの野菜作りたちの耳をつんざくばかりのプロヴァンス言葉が現われた。皆すぐ打ちとけた。妙な道具を持って旅行しているこの感じのいいパリ人も、すぐ仲間に加えられた。いろいろな話がおそろしくせきこんだ調子でかわされた。

つい引用が長くなったが、なんとも魅惑的な情景である。古きよき時代の一情景にすぎぬと思われるかもしれないが、そういうことはない。私は、時間の都合もあって、たいていは「T・E・E」とよばれる国際線の超特急や特急に乗っていたが、時たま普通列車に乗ると、これほどではないにしても、それに似た光景を眼にしたものだ。眼にしただけではなく、私も、手作りのパンやパテをご馳走になり、葡萄酒を飲まされ、その家庭の内情や苦勞話を、長々と聞かされた。そして、汽車による移動と、その内部にあふれる生活感とのこのような結びつきを通して、いかにも自分は旅をしているという思いを味わたたのである。

そして、こういう旅心を味わうと、ジェット機で雄大な距離をひと飛びし、何かを見たり味わったりすることよりも旅程を消化することが目的であるかのようにそそくさと歩きまわり、再びジェット機で連れ戻される近頃の旅行が、なんとも抽象的なもの思われてくる。私は、学生の頃、休暇などで郷里に戻るたびに、一晩夜行列車でゆられることによってたちまち一変するあたりの眺めと自分の感受性とのあいだに或る不和を覚え、何日かは心が落ちつかなかったものだが、ジェット機でたとえば東京からバリへやって来た場合、われわれの感受性と外界とのあいだに生ずる亀裂は、とてもその程度にとどまるものではあるまい。たしかに、ジェット機は、われわれの知性が作り出したものにはちがいないが、われわれの感受性は、知性の作品がはらむものを、直ちにおのれの支配下に置くようにできてはいない。一方では、猛烈な速度で空を飛びながらも、いま一方で、われわれの感受性は、その一步一步が足の裏に触れる大地の感覚によって支えられることを、原始の時代そのままに要求し続けている。そういう点で、われわれの感受性は、ジェット機のことを、完全におのれの所有物となしえていない。ホロウィッツというピアニストは、いまだに飛行機に乗りうとはしないそうだが、これは、ただ単に事故への恐怖や高所恐怖症のせいばかりではあるまい。あのピアニストの不安な感受性は、人一倍おのれを支える日常感覚や現実感を要求するのであって、飛行機による急速な移動や、この移動が引き起す外界の異常な変容は、彼にはどうにも耐えられぬものである。

だが、われわれの感受性と外界とのあいだの亀裂の幅があまり大きくなると、われわれは、それを亀裂として意識することもなくなるようだ。正常な有機体は、異物の侵入があれば、たちまちそれをとらえて、押し出し、あるいは吐き出し、かくしておのれの安定をはかるのだが、その異物があまりに巨大なものである場合は、ただそれを支えるだけでせいじいばいであって、弱った胃のように、ただのび切ってしまう。ジェット機の旅行になれた人びとの感受性は、ちょうどこののび切った胃のようなものであって、彼らは、おの